

本研究は、満州国において1932年3月から1945年8月まで13年間存在していた満州映画協会を取り上げ、そこで製作された映画の諸相を究明することを目的にした。満州映画協会（以下、満映）に関する従来の研究は、満映の沿革、満映で活動していた構成員の個人史、製作された映画のあらすじの要約に重きが置かれてきたし、満映の役割についても宣伝のための国策映画の製作であるというような平面的な記述が多くなされてきた。そこには、何故そのような劇映画が作られたかと云った満映内部からの視線が欠けていた。

本研究は、満映において断行された劇映画製作の方向性の変化に焦点を当て、満映が産出した劇映画の当時の諸相を見出そうとしたものである。満映の劇映画製作において変化してきた方向性とは、「娯楽重視」と「満人中心」であった。「娯楽重視」は、大衆に近づけない宣伝性の高い濃厚な作品より、より多くの人々に接近できる娯楽性の強い映画を製作しようとしたことである。「満人中心」は二つの次元において行われた。一つは、製作を「満人」に担当させることであり、もう一つは、作品内容に「満州文化」を反映することであった。

満映の劇映画の製作方向性の変化は、単に観客動員を増加させる為だけではなく、複合民族国家である満州国において、満映が多民族を満足させる映画を作ること成功すれば、そうした経験を通じて「東洋のハリウッド」としての役割を果たせるといふ、満映の抱負が入っていたことであった。また、大衆に対する波及力の強い映画を通じて満州国の「独立的な」文化を作り出し、「満州」という「想像の共同体」を形成することへの一助にもなり、大衆底辺からナショナリズムを喚起しようとする目的もあったと考えられる。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等) :

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等) :

題名: 「満州国劇映画の諸相—満州映画協会の製作方向の変化を中心として」

発表者: 姜泰雄

論文掲載誌: 『韓国文学研究』33集 (東国大学 韓国文学研究所 刊行)

掲載時期: 2007年 12月 30日

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等) :